

□～安全・安心・魅力ある川内川を次世代の子供たちへ～ 川内川サミットを開催！！

平成18年7月の川内川大水害から10年、大水害の経験を経て、“安全で安心な魅力ある川内川を『次世代の子供たち』へどのように伝えていくのか”を考える【川内川サミット】を平成28年12月18日、薩摩川内市で開催しました。

- ・川内川沿川市町の全首長、河川管理者などが登壇し、「防災・減災」と「かわまちづくり」をテーマにディスカッションを行い、様々な事例紹介や想いのこもった発言がありました。
- ・5名の首長が様々な活動を通じて安全・安心で魅力ある川内川を次世代の子供たちに引き継いでいくことを「川内川サミット宣言2016」として共同で宣言し、会場からも大きな拍手がありました。
- ・流域内外から住民・企業・行政、約**350名**の方が訪れるなど関心も高く、TVや新聞報道もありました。



サミット宣言



国立環境研究所 脇岡室長による基調講演



パネルもご覧いただきました

川内川サミット宣言 2016

川内川流域では平成18年7月に、下流は薩摩川内市から上流は及びの市にいたる全川にわたり、浸水面積約2,800ha、浸水家屋約2,400戸に及ぶ最大な被害に見舞われました。この大被害を受け、河川国策実現時策特別緊急事業中核回廊復興競争事業のハード対策とともに、防災・減災に関するソフト対策として「川内川水系に強い地域づくり（グランドデザイン）」を流域全体で推進してまいりました。

私たちはこれからは、地域住民、自治体及び国等が連携し、流域一帯の防災力の向上に努め、減災に取り組んでまいります。また、一方で私たちは多くのあみをもちつづける川内川の良好な水環境維持・空間整備を、整備する「かわまちづくり」にも、全力で取り組んでまいります。

我々は、以下の活動を通じて安全・安心で魅力ある川内川を次世代の子供たちに引き継いでいくことに宣言します。

1. 私たちは、過去の被害を忘れず、地域住民、自治体及び国等が連携し取り組んできた「防災・減災」に係るハード対策とソフト対策を、流域一帯の取り組みとして今後も継続・徹底させ、安全・安心な川内川を次世代に引き継いでまいります。
1. 私たちは、これまで川内川の各地で用い、川を体験する取り組みを行ってきました。これからは流域一帯の観点からそれを普及させ、「川内川流域かわまちづくり」として取り組むとともに地域の連携を図り、魅力ある川内川を次世代に引き継いでまいります。

平成28年12月18日
薩摩川内市長 吉野 秀雄
川内川事務所長 佐藤 隆
伊佐市長 伊藤 善博
湧水町市長 藤田 善博
及びの市長 利根 隆明

開催日：平成28年12月18日（日）
場 所：薩摩川内市入来文化ホール
テーマ：安全・安心・魅力ある川内川を次世代の子供たちへ
第一部：基調講演
「気候変動の影響と適応策」
国立環境研究所 地域環境影響評価研究室長 脇岡 靖明
第二部：川内川サミット
・コーディネーター
九州大学 小松名誉教授
・パネリスト
薩摩川内市長、さつま町長、伊佐市長、湧水町長、えびの市長、
九州地方整備局河川部長、
川内川河川事務所長、鶴田ダム管理所長

□流域のさまざまな団体が発言！

第5回「川内川を語りもんそかい」を開催！！

今回で5回目を迎えた川内川圏域懇談会「川内川を語りもんそかい」を2月21日(火)に鹿児島県伊佐市内で開催。今回は10団体17名、個人3名、行政8機関、計**58名**が参加。

今回は、「川内川水系かわまちづくりを核とした地域活性化にも資することを目的として、流域内の様々な情報を集約した『かわまちづくりマップ』の作成について」と題して、1班7名程度に分かれて8班でグループワークを行い、様々な視点から活発な意見が出されました。

終了後の懇親会も計**45名**の参加で引き続き盛り上がりました。



座長挨拶(川内川流域連携ネットワーク代表 中村周二氏)



事務所長挨拶



これが川内川のチヌジリですよ！
(川内川上流漁協(鹿児島県)より)



白熱するグループワーク



各班の発表



懇親会に参加された皆さん

【グループワークで出された主な意見】

- ・カヌーの先端にカメラを付けて映像をフリーワイファイなどで配信してはどうか。
- ・マップの大きさは女性のハンドバッグに入るくらいのサイズ。
- ・地域の人しか知らないものを取り入れる。
- ・せごどん放送に伴う歴史マップや野鳥、神社などテーマごとに作成する。

川内川今昔(12) 舟運の川浚え(かわさらえ)

江戸時代菱刈方面の農民は、宮之城(現在のさつま町)河原にあった藩の菱刈蔵に年貢を納めていました。陸路は大変な悪路で、雨ともなれば輸送は困難を極めた、と言います。特に、宮之城の穴川が合流する「穴川の滑り(なめり)」と呼ばれる川底が平たい岩の場所は難所で、馬が足を折ったりすることも度々あったとのこと。舟運のための川の開削は菱刈の人々の悲願でした。

穴川の滑りは、今でも穴川が川内川本川に合流する付近で見ることが出来ます。河川の水量が少ない時は、川底が露出し、この「穴川の滑り」の平たい岩盤が顔を出します。

正保年中(1644年～1648年)、宮之城第4代領主島津久通の時、宮之城の轟の瀬(宮之城とどろ大橋の下流部)の川浚えを行いました。水勢が荒く舟の通行は、難しかったとの記録が残されています。工事の痕跡は「切通し」と呼ばれ轟の瀬の右岸側(流れに向かって右側)に見ることが出来ます。

これを解決したのが、1843年の「天保の川浚え」です。これにより曾木の滝下から宮之城まで舟が通行するようになりました。轟の瀬の中央部からやや左岸側に川浚え後の流れを見ることが出来ます。これは「新川」と呼ばれました。工事の発案・責任者は伊佐の堀之内良眼坊であり、曾木の滝公園に記念碑があります。また、鶴田ダム建設中に川の中から川浚えを記録した石碑(権太郎碑:記録した石工の名前に由来)が発見され、ダム2km上流の湖岸道路の脇に保存されています。

川に大きな岩盤があるところでは、焼石法という方法で岩盤を砕いたということです。上流で川をせき止め岩盤に薪を積み上げ幾日も火を燃やして岩盤を焼いた後、一気に水を流し急冷してひび割れをさせて、それを切り取る方法です。

明治になってからも、河川の開削は各所で行われ舟運は活発に行われましたが、自動車による陸上交通の発達とともに舟運は衰退していきました。

参考資料:「宮之城文化8号(宮之城文化懇談会)」、宮之城堤防の「歴史プレート」説明文

レポーター:九州防災エキスパート 加治屋 義信氏[三州技術コンサルタント(株)]



馬が足を折った
という「穴川の滑り」



流れの激しい
「切通し」



舟運に成功した
「新川」



川浚えを記録した
「権太郎碑」

「川内川Webマガジン せせらぎ」とは、川内川河川事務所の動きを住民の皆様に広く知ってもらおう事と、川内川流域での川内川に関する地元のボランティア活動や催し等の情報交換の場になる事を目的とし、川内川河川事務所ホームページ上で定期的に更新しています。お気軽にご覧ください。

川内川河川事務所ホームページアドレス <http://www.qsr.mlit.go.jp/sendai/>

皆様がお持ちの、川内川に関するさまざまな思いや意見、河川清掃等のイベント情報を「川内川Webマガジン せせらぎ」にお寄せください。文字数は300字程度。お名前と連絡先も一緒にお送りください。写真もあれば、ぜひご提供いただきますようお願いいたします。皆様からの投稿を今後も掲載していきますので、よろしくお祈りいたします。(スペースの関係等で掲載できない場合もあります。ご了承ください。)

メールで送られる場合はsendai@qsr.mlit.go.jp

FAXなら 0996-25-0862へどうぞ!

「川内川Webマガジン せせらぎ」に関するご相談・お問い合わせ先

事務局:国土交通省 川内川河川事務所 調査課 TEL:0996-22-3359

FAX:0996-25-0862